

実践報告

産学官連携による SDGs 教育とグローバル人材育成事業の実践 ～中部国際空港協議会/県庁との海外渡航啓発事業第 2 弾～

栗 田 聡 子

The potentials and challenges of globally competent human resources education through promotion of SDGs by industry-university-government collaboration

KURITA Satoko

〈Abstract〉

In 2019 December, the Center for International Education & Research of Mie University invited Ms. Madoka Tatsuno, a well-known educator in the field of global education with focus on “global citizenship” for sustainable development goals (SDGs). The event was supported by collaboration with Chubu International Airport Promotion Council and Mie Prefectural Government, which started from last year. The success of the event largely owes to Ms. Tatsuno’s coaching style of teaching as well as her attractive personality and life stories. Besides, our clear target setting of participants was crucial for the success. More than half of 130 participants who had not been strongly motivated to participate in such educational events attended the event for their class credits. The importance and challenges to promote global education through SDGs by collaborations with industries are discussed.

キーワード：グローバル人材育成、国際教育、産学官連携、SDGs、コーチング教育

1. はじめに

2019 年 12 月、「現代用語の基礎知識選 2019 ユーキャン新語・流行語大賞」が発表された。大賞に選ばれたのは、ラグビー・ワールドカップ（W 杯）で日本代表を率いたジェイミー・ジョセフ・ヘッドコーチが掲げた「ONE TEAM（ワンチーム）」。7 カ国 15 人の海外出身選手を含む 31 人の選手は「桜の戦士ワンチーム」として快進撃を続け、日本ラグビー史上初の決勝トーナメント進出を成し遂げた姿に列島が熱狂した。その他、流行語大賞のトップ 10 を飾ったのは、「軽減税率」「スマイリングシンデレラ/しぶこ」（42 年ぶりにゴルフ海外メジャー制覇を果たした洪野日向子選手の愛称）、「タピる」（タピオカ入り食品を食べる）、「免許返納」、「令和」、等である。

一方で、世界はどうだろうか。Oxford 辞典の編集者らは、11 月に “Oxford Word of the Year 2019”（2019 年を代表する言葉）として Climate Emergency を発表した。「気候変動

を抑制・停止させるため、および気候変動による復元不可能な環境被害を避けるために緊急の行動が必要な状況」という意味である (Oxford dictionary, 2019)。このフレーズは今年に入って使用例が急増しており、9 月には前年の 100 倍以上に増加したという。最終選考に残った言葉も地球環境に関連するものが中心で、climate action, climate denial (気候変動が人類の活動により引き起こされることを否定すること、または気候変動が人類の繁栄や文明への重大な脅威になることを否定すること) ecocide (故意または不注意な人間の活動で自然環境を破壊すること) extinction (動植物が絶滅すること)、などがあげられている (Oxford dictionary, 2019)。

2019 年、世界は気候変動による影響とみられる史上最強の台風や大雨、洪水や山林火災に見舞われた年となった。日本は最も甚大な自然災害に遭った国の一つであり、千葉県を中心とした関東では 9 月以降の台風と大雨の影響で 50,000 以上の世帯が全壊、もしくは一部破損、床上 (下) 浸水し、何十万人もの人々の日常が奪われた。そのような自然災害に喘ぐ日本に居住しながら、日本人の多くがグローバル規模の環境問題を他人事のように捉え、ラグビーやタピオカ飲料に夢中でいられたのは何故だろうか。もちろん、スポーツは時に政治よりも求心力があり、人々の結束を強める力は無視できないのであるが。危機的な状況にある地球規模の環境問題に意識が向かないとすれば、私たちが育った環境や受けた教育に起因している可能性がある。

昨年 10 月、三重大学国際交流センターは、初めての産学官連携事業として若者層の渡航促進をすすめる中部国際空港協議会と協議会メンバーの三重県庁地域連携部交通政策課との共催で三重大生を主に対象とした「グローバル人材セミナー」を開催した。講演者は「知の巨人」と称される立命館環太平洋大学 (APU) の出口治明学長であった。出口学長は自分自身の価値観を築き上げるためには、「人と会うこと、本を読むこと、旅をすること」で様々な情報と体験を得ることが欠かせないことを説かれ、多くの参加学生にとって、将来につながる「今」を懸命に生きることの大切さに気付く貴重な機会となった。

今年度は産学官連携によるグローバル人材育成事業も 2 回目となることから、「環境先進大学」を掲げてきた三重大学が注力している「SDGs 教育 (または ESD) (持続可能な開発を目標とする教育)」を通して学生の渡航促進を実施することとなった。最終的なゴールの 1 つは学生の海外渡航だとしても、その動機づけとして世界規模の環境問題や貧困問題を自分ごとのように受け止めることの大切さを知ることは重要である。その目的達成のために招聘した講師は、近年「グローバル・シチズンシップ (地球志民)」をテーマにグローバル教育の分野で全国的に活躍されている辰野まどか氏であった。

本報告では、「グローバル人材白熱教室 2019『未来を創るのは私たちだ。』」と題して開

催した辰野氏のセミナー内容と結果を報告し、グローバル人材育成（国際教育）における SDGs 教育の重要さと親和性、そして課題について検討する場とする。

2. 若者層の渡航促進事業と国際教育の親和性

今回の「グローバル人材白熱教室 2019」の開催を可能にしたのは、中部国際空港（セントレア）利用促進協議会（以下、協議会）とそのメンバーである三重県地域連携部交通政策課との産学官連携であった。協議会は 2001 年に設立され、東海 3 県と名古屋市、（一社）中部経済連合会、名古屋商工会議所、中部国際空港（株）および関係企業・団体等から構成されている。「中部国際空港が、その機能を十分に発揮していくことが可能となるよう、地域が中心となって、同空港の利用促進・活用等の取り組みを一体的に推進していくこと」を目的としている（中部経済連合会，2019）。

セントレアが 4 月に発表した内容によると、2018 年度の航空旅客数は LCC の新規就航や増便が相次いだこともあり、国際線旅客における前年度比は 110% で 609 万 9,796 人となり、5 年連続増加で過去最高を記録したとのことである（Fly Team News, 2019）

だが、1997 年以降、全体的に 20 歳代の出国者数が減少しており、1997 年と 2016 年対比で 37% 減（▲169 万人）との報告がある。若者層に限れば、中部三県は平均出国率の 17.3% よりも低い 15% であり、三重（13%）はその中でも最低の比率となっている（愛知 18%、岐阜 14%）（国土交通省，2019）。本県は南北に長くセントレアまで距離があるといえども、津からセントレアは船で 45 分のアクセスもあることから、地理的な問題だけではない可能性がある。協議会は、アウトバウンド需要を持続的に成長させるためには、地域の若年の利用を促進させることが最も重要と認識しており、地域の自治体等と取り組むべき課題として認識を共有してきた。2016 年度以降、愛知県下では「大学」×「セントレア」×「LCC（航空会社）」という産学（官）連携の施策のもと様々なタイアップ企画や授業が実施されている（国土交通省，2019；セントレア，2019）。

それらの授業やイベントは航空会社にとっては経済的利益追求のための促進事業であるが、大学は学生の国際感覚を高め、海外留学を含めた海外渡航へ踏み出す動機を強めることができる。留学生とのワークショップでは、日本人学生が英語などの語学を通じたコミュニケーションスキルを高め、国際交流が促進される。これだけの利点だけでも、国際空港の利用を推進する機関と大学とのタイアップはグローバル人材育成を推進していく上で大いに親和性があると考えられる（栗田，2019）。

昨年 10 月、協議会のメンバーである三重県庁は県の若者層のセントレア利用拡大（出国率上昇）を目的に、本学国際交流センターとタイアップして「グローバル人材セミナー」

を開催した。招聘した講師は津市出身で、ビジネスや歴史の分野で多くのベストセラー書籍を執筆してきた前述の出口治明学長（立命館環太平洋大学（APU））であった。そのセミナーの成功を受け、今年度も引き続きセミナーが産学官連携のもと開催されることになった。今年度は昨年とは異なるアプローチをとったのだが、次のセクションでその経緯を記す。

3. 招聘講師の選定とプロセス

3.1. 持続可能な開発目標（SDGs）

グローバル化が加速する世界は、情報技術の発展にともない地球規模で人やモノ、資本が移動しており、「一国の経済危機が瞬時に他国に連鎖するのと同様、気候変動、自然災害、感染症といった地球規模の課題も連鎖して発生し、経済成長や、貧困・格差・保健等の社会問題にも波及して深刻な影響を及ぼす時代になってきている」（外務省，2019）。

国連は、2015年9月に国連サミットで「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を採択、「持続可能な開発目標（SDGs）」として2030年を期限とする開発目標を記載し、「誰一人取り残さない（no one left behind）」社会の実現を目指している（国連開発計画，2019）。SDGsでは具体的に17の項目と169のターゲットが設定され、ミレニアム開発目標（MDGs）で達成できなかったものを全うすることが目標とされている。経済、社会および環境を「調和するべき3つの側面」と定義し、「地球」「繁栄」「平和」「パートナーシップ」を4つの軸としている。平和なくしては持続可能な開発はあり得ず、国境を越えた地球規模のパートナーシップがなければ、地球も人間も危機的な状況から脱することはできず、未来は持続しない、という警告である。よって、SDGsの17項目は先進国も含めて国際社会全体で取り組むべき喫緊の課題（官邸，2019）であり、日本においても、政府や教育組織だけでなく社会のあらゆる主体が積極的な役割を果たすことが期待されている（文部科学省，2019）。

3.2. SDGsの推進と日本の現状

安倍総理は9月に開催されたSDGサミット2019において「次のSDGサミットまでに、国内外における取組を更に加速させる」との決意を表明し、G20大阪サミットの成果を含む過去4年間のSDGs推進の実績や「SDGs未来都市」の取組を紹介した（外務省，2019）。一方で、同じく9月に開催された国連気候変動枠組み条約第25回締結国会議（COP25）に参加した小泉進次郎環境相は、温暖化対策の取り組みについて具体策を説明するかわりに「セクシーでなければ」と発言、各国から失笑に近い形で注目を浴びた。さ

らに、二酸化炭素の排出量が多い石炭火力発電所の新設を計画している日本に対する批判も高まり、世界の環境団体で作る気候行動ネットワークから地球温暖化に消極的な国に贈る「化石賞」をまたもや受賞（2 回目）した。気候ネットワークの国際ディレクターである平田仁子（きみこ）氏が指摘するように、今、日本に求められているのは「言葉ではなく行動」（木村，2019）なのであろう。

だが、そのためには、未来を担う日本の若者の意識を教育で高める必要がある。各国の教育機関は、2015 年以降 SDGs を取り入れた教育プログラムの作成に尽力することを国連から期待されており（国連開発目標，2019）、グローバル人材教育（国際教育）に明白なかたちで加わってきたのは当然のことと言える。

3.3. グローバル人材育成と SDGs 教育

2012 年、政府は「グローバル人材育成推進会議」を設置、国家の成長を支えるグローバル人材の育成と活用が重要な課題であると提言した。バブル崩壊以来、経済的・社会的な停滞に陥った経験を持つ日本においては、国の牽引力になりうる国際的に活躍できるグローバル人材は、ビジネスの世界だけでなく政治や学術を含めた様々な分野で必要と考えられている。それは、「産業・経済の急速な高度化・グローバル化の中で、我が国がこのまま極東の小国へと転落してしまう」（官邸，2012）ことを回避するためでもあるとされた。しかし、温暖化問題を筆頭とする地球規模の緊迫した課題がついに顕在化された現在、グローバル人材を育成する必要性は、もはや自国ために世界の中で闘うに十分な競争力を持つ若者を育てるため（だけ）にあるのではない。SDGs の達成が叫ばれる現在、地球規模の問題解決に立ち向かうために国を超えて人々とパートナーシップを結び、行動できる人材を育てることへ重点が移動している。よって、教育機関、とりわけグローバル人材育成（国際教育）を担う教育関係者は SDGs 教育の必要性を理解し、率先して推進していく責任があるだろう。この意味で、グローバル人材教育と SDGs 教育は極めて親和性が高いと言える。

3.4. 「先進環境大学」としての三重大学

三重大学は「三重の力を世界へ」をスローガンに、地域創生貢献大学としてのナンバー・ワンを目指しており、グローバルな視野から地域の課題に取り組む「グローバル」な思考ができる「グローバル人材」の育成に力を入れてきた。一方で、本学は「地域創生貢献大学」を目指す以前の 2006 年度から、当時の豊田学長をはじめとした教職員らの考えにより「環境先進大学」を実現するための長い道のりを歩んできた（三重大学，2019）。本学

が環境に力を入れてきた経緯は、三重県が四日市公害に代表されるような深刻な公害問題を経験した歴史にあり、教員は学識的な観点から県の環境審議会等に参加するなど、その解決に向けて貢献してきたことによる。2007 年には環境に関する国際標準規格 (ISO 14001) の認証を取得することにより地域をリードし、「科学的地域環境人材 (SciLes) の育成」プログラムを実施している。その「環境の文化が根付く大学づくり」をモットーにした本学の環境マネジメントは、国立大学法人評価委員会により「非常に優れている法人の取組例」として取り上げられた (三重大学, 2019)。

なお、2019 年 1 月には国連と世界の高等教育機関とのネットワークである国連アカデミック・インパクト (UN Academic Impact : UNAI) に加盟し、4 月にはイギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education (THE)」が発表した「THE 大学インパクトランキング 2019」の SDG 12 (つくる責任つかう責任) において、日本国内で 1 位、世界で 31 位にランクインした (Times Higher Education 日本版, 2019)。この意味でも、「先進環境大学」を目指す三重大学が取り組むべきグローバル人材教育の方向性は確実に SDGs の線上にあると言えるだろう。

3.5. 参加者のターゲットと二極化問題

上記のような経緯から、2 回目の産学官連携によるグローバル人材育成事業は SDGs 教育に精通している専門家に講演を依頼することとなった。国際教育を推進する上で、学生にとって刺激となるような講演者を招聘するためには予算が必要である。地方の国立大学での予算では実現が難しい事業も、産学官連携により可能になることもある。

その利益を享受するのは全てのステークホルダーなのであるが、特に参加学生らが受ける恩恵は測り知れない。昨年招聘した出口治明 APU 学長は、卓越した教養と「一期一会」を志とする人柄の魅力で学生らをひきつけた。文系軽視で不安を抱えている学生らの心も読みながら、「知の巨人」はりべラルアーツを軽視しがちな日本や高等教育機関にファクトとロジックから警告を与えた。熱心に出口学長の言葉をノートに書き記す参加者が多く見られたのは、参加を「希望者」に限定したからでもあった。昨年のセミナーは既に世界や留学に向けて意欲的で向上心の高い学生が参加者の大半を占めていたと言えよう。

一般的に、国際教育をテーマにしたイベントは、他の教育関連のイベントと同様、多くの参加者を集めることが困難であり、学生の「二極化」という課題 (学研, 2012) がある。グローバル化が加速する中、海外留学を経験してみたいと思う学生が増えている一方で、全く海外に関心のない学生も多い。昨年の出口学長のセミナーに参加した学生らの多くは前者に属していたわけだが、今回は試験的な意味もあり、参加者のターゲットに後者を重

点的に含むことにした。そのため、会場の収容人数を昨年よりも増やし、日本人学部生の 1 年生が多く履修する授業（著者の担当）を含め、他の教員からの協力も求めて参加を促した。その結果、日本人学生の 6 割以上は授業単位がインセンティブの参加となり、国際教育や SDGs といったテーマに対して特に関心のない層が多く含まれていた（事前アンケートより）。

3.6. 講演者の選定について

上記で説明したターゲット設定により、SDGs が掲げる 17 項目のいずれかに精通する専門家よりも、学部生の若い心に刺激を与え、海外留学へのモチベーションを上げることができる話し手の方が適切であると判断した。

著者が国際交流関連の研究者や機関に問い合わせて調べたところ、辰野まどか氏（グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）社団法人代表理事）が最適な候補としてあがった。辰野氏は 2015 年より「持続可能な開発のための教育（ESD）円卓会議」の委員を務め、東洋大学食環境科学研究科客員教授でもある。「トビタテ！留学 JAPAN」高校生コースでは事前事後研修を担当、名古屋国際交流センター（NIC）でグローバル人材育成アドバイザーとしても活躍されている。GiFT が教育機関や企業を対象として実施しているグローバル教育は「グローバル・シチズンシップ」育成を掲げており、GiFT の HP には以下のとおり説明されている。「GiFT では、一人でも多くの人が自らの世界をよりよくする志である、『グローバル・シチズンシップ（地球志民）』と繋がり、次世代を意識して行動できるようにするための教育を大切にしています。人類という共通項を示すことで、平和な社会・多様性を尊重する社会を作っていくということ。そして、地球規模の課題に取り組める人材を育成し、次世代を意識して教育を考えていくことの持つ可能性を、身を持って感じているからです」（GiFT, 2019）。この提言の強みは、「リーダーシップ」や「英語コミュニケーション能力」など多くの項目から曖昧な定義になっている「グローバル人材」という概念を「自らの世界をよりよくする志」、「グローバル人材教育」を「他の志とつながり、次世代を意識して行動できるようにすること」と容易に理解しやすい言葉に置き換えている点である。さらに、SDGs 教育がグローバル人材教育の核として明白に示されている点も、SDGs 教育の推進が求められる各教育機関が進むべき方向性と合致していると言えよう。

加えて、コーチングファームでの勤務経験がある辰野氏に対して、「コーチング」という対話を重ねるコミュニケーションの手法がどのように使用されるのか、果たして（内向きな傾向のある）学生の心を捉えて「やる気」を引き出すことができるのか、それらの点

についても教育者の立場から興味があった。

従来の大学では教員の一方的な知識の伝達を受ける「受け身型」の授業が一般的であったが、近年では学生が能動的に学ぶことができる「アクティブ・ラーニング」手法が推奨されている。教員からの「知識の伝達」の重要性と軽視についての議論は別として、コーチングの手法をアクティブ・ラーニングに活用して授業を活性化するコーチング教育がオランダを中心に高い効果を実証されている（菅原・石川，2015）ことから、実際に有効なのであれば学ぶ機会になると考えた。

以上の理由で、今年度のグローバル人材事業は辰野まどか氏に託され、毎年 12 月に実施している「国際交流 Days」のメインイベントとして 12 月 5 日（木）夕方に開催するに至った。辰野氏のコーチング形式のセミナーが参加学生の心を刺激することを期待し、タイトルは「グローバル人材白熱教室 2019」とした。

4. 「グローバル人材白熱教室 2019」の開催結果

4.1. 主催と共催について

今年度の産学官連携によるグローバル人材育成事業は本学が教育の指針としている SDGs を海外渡航へのインセンティブとしていることから、共催として本学の「国際環境教育研究センター」と「SDGs・ESD 教育開発・推進プロジェクト」が加わった。なお、本学は新制として創立 70 周年を迎えたことから、記念行事として開催することとなった。当日は、中部国際空港協議会（県庁）から海外渡航を促進するグッズやパンフレットが各参加者へ提供された。

4.2. イベントのポスター作成

大学と県庁の HP で掲載する周知用のポスターは、「海外」と「SDGs」そして「航空機」を融合させるものとした。デザインは、昨年のセミナーで趣旨に合う美しいポスターを作成してくれた本学の大学院生に依頼した。参加者の年代に近いことから、若者にアピールできるデザインやキャッチコピーも心得ている。今回の「グローバル人材白熱教室 2019」の副



図 1. イベントのポスター



図 2. SDGs ポスター

タイトルとして「未来を創るのは、私だ。」というコピーが加えられた。「私」という単語により、SDGs の課題が持つ喫緊性と求められる主体性が表現され、世界地図と航空機が海外渡航を想起させるイメージの作品となった (図 1)。また、会場を SDGs 17 項目のカラフルなイメージと先進環境大学を目指す三重大学、そしてセントレア空港のロゴを組み合わせたポスター (図 2) を作成し、会場を SDGs の雰囲気です飾った。

4.3. 参加者について

12 月 5 日の「グローバル人材白熱教室」講演会に参加した人数は、約 130 名 (正規生 65 名 (うち院生 7 名)、留学生約 20 名、教職員約 20 名、一般 20 名、県庁関係者 5 名) であった。

正規生の大半は学部 1 年生で、約 6 割が授業の一環として参加していた。留学生の日本語のレベルは「中級 2 以上」であり、彼らの多くは「日本語の向上」を目的として日本語教員に促されての参加であった。出身国は中国とベトナムを中心にドイツなどヨーロッパ諸国も含まれていた。全参加者の大半は google form から申し込んでおり、一般からの参加者は本学の HP や他の教員からの紹介で参加してくれた高校教員や県庁関係の方々である。ちょうど高校の期末テストと重なった時期だったとのことで、残念ながら高校生への参加は皆無であった。

4.4. 司会について

講演会の司会は、昨年も司会を担当してくれた日本人の女子大学院生 (生物資源研究科) と友人であるサモアからの留学生 (同研究科で研究員) が務めてくれた。グローバルで和やかな国際交流の雰囲気を期待したとおり、二人の掛け合いによる司会で、イベントは微笑ましい雰囲気の中で進められた。



司会をしてくれた大学院生

4.5. セミナーの内容について

冒頭の国際交流副センター長による開会挨拶に続き、県庁交通政策課の職員よりセントレアと LCC の利便性について説明があり、学生時代に海外への渡航を経験する大切さについて話題が提供された。

続いて拍手の中、辰野まどか氏が登壇、自己紹介と SDGs についての話題の後、人生のターニングポ



セミナーで話す辰野まどか氏

イントになった 17 歳の原体験について語られた。英語が苦手勉強を放棄していた 17 歳の誕生日に、母親から「ひとりでスイスの国際会議にでる権利をプレゼントします！」と言い渡され、環境問題等が話し合われるような大規模な国際会議に参加したとのこと。クライマックスは、国際会議の最終日での出来事。参加者がグループになり一人一人感想を述べる順番がまわってきた時、17 歳の辰野氏は会議の素晴らしさについて語り、「これからもこのような場が続いてほしいと思います」と言った。その瞬間、「何言っているの!?! あなたが続けるんでしょう!?!」と厳しい口調で年配の女性に叱責されたのだ。その衝撃的な経験が、グローバル・シチズンシップ教育を始めさせたきっかけであり、その後の様々な困難を乗り越えさせた原動力であったとのことである。

後半で、辰野氏は「30 年後の 2050 年、自分は何をしているのでしょうか? 妄想してください」と参加者に課題を与え、その内容を隣席の人に語る、という指示を与えた。「妄想は実現不可能でもオッケーです。語る方は自由に、聞き役は全力で聞いてくださいね」。ワクワクした表情で自分の 30 年後について妄想し、初対面の人々に臆せず語る参加者たち。会場は楽しく、ポジティブな活気にあふれた。辰野氏は、「世界や社会がかかえる課題
「30 年後の自分」について話す参加者ら
を自分ごとのように感じ、人々と協働して行動することは難しい。だから、まず自分について知り、受け入れることが大事」と、参加者にメッセージを伝えた。



質疑応答では、留学や人生経験に関する質問に対して丁寧な返答があり、最後は参加者全員で記念撮影をした後、セミナーは盛会のもと終了した。

5. 事後アンケート

県庁交通政策課が受付時でアンケートを配布し、回収した回答結果 (76 名) の一部を紹介する。

5.1. セミナーの満足度について

「今回のセミナーはいかがでしたか。その理由もお教えてください」という問いに対して、54 名 (70.1%) もの参加者が「大変満足」、15 名 (19.5%) が「やや満足」と答え、辰野氏の講演に対する満足度が全体的に極めて高いことがわかった。「大変満足」した学生らがあげた理由は、以下のとおり大きく 3 つに分類することができる。

<辰野氏と生き方に刺激されたから>

- 型にはまっていない、素敵な生き方に憧れました。
- とても辰野さんの生き方に刺激を受けました。とにかく「行動」したいと思いました！
- 今までに聞いたことのない経験談だったので、とても面白かった。世界に出ることで全く世界の見方が変わるんだと感じた。
- お話の仕方が面白くすごく引き込まれた。海外に少しでも興味はあったけど、話を聞いて、より海外に飛び立ってみたいと思った。
- (今まで) 受動的に行動してきたが、少しは能動的に行動しようと思った。
- 人生スムーズにいかないことが多くても、夢をあきらめずに追いかけてみようと思ったからです。
- 若いころから自分がしたいと思っていることをする大切さがわかったから。

<自分について見つめ直す機会を得たから>

- 知らない人とのワークを通して自分を見つめなおす機会になりました。
- グローバルなどの言葉を聞いたとき、世界を見てしまうが、まず自分を見つめるのが大事ということが心に残りました。
- お話がとても面白く、1時間経つのが早く感じました。自分がこれからどのような人生を送りたいのか、考え直してみたいです。
- 学生のうちから活動をされていた方の、経験を基にした講演を聞くことができ、今の生活の過ごし方について改めて考えさせられたから。

<(SDG 等について) 学べたから>

- SDGs は大変小難しいものと考えていましたが、大変分かりやすく楽しく学ぶことができましたからです。
- グローバルについて分かりやすく教えていただきすごくためになる講演会でした。
- かなり自分の知らない情報が得られた。

一方で、満足度が低かった学生からは、「結局、SDGs, SDGs と呪文のように聞かされただけで中身は伝わらなかった」「参加方が苦手です」との感想や、留学生からは「2時間の航空会社の広告を見なければならないことは全然ダメです」と若者の海外渡航を促がす目的を含むイベントに対して批判的な意見が2件見られた。

上記からわかるように、本セミナーにおいては、参加者の満足度は主に辰野氏の生き方から刺激を受け、現在の自分と未来について見つめ直すことができた事に起因していた。

それは、辰野氏の特別な国際経験からだけでなく、観客と対話をするように語る辰野氏の卓越したコーチング力と人柄の魅力によるものであったと推測される。

5. 2. LCC へのイメージについて

「今回のセミナーを受講して、LCC（格安航空会社）のイメージは変わりましたか（利用したいですか）？」との問いに関しては、一番多数は 38 名（49.4%）の「やや変わった」であり、「大変変わった」と答えた参加者は 14 名（18.2%）であった。低価格のために安全面で疑われることの多い LCC に対するネガティブなイメージが「変わった」と答えた参加者が、約 7 割に達していた。「大変変わった」と答えた参加者からは、「もっと遠いと感じていた飛行機を身近に感じた」「友達とたくさん旅行しに行きたいなあと思いました」等のコメントが含まれていた。この結果は、LCC 向けの新ターミナル（第 2 ターミナル）を 9 月にオープンし、LCC の利用を促進している中部国際空港協議会にとって一定の成果があったと言えるだろう。ただ、留学生からは、「大学で広告を見せることはダメです」との批判的なコメントも見られた。

5. 3. 海外旅行や留学について

「今回のセミナーを受講して、海外旅行や留学をしたいと思いましたが？」という問いは、主催である本学国際交流センターにとって一番効果を期待する項目であった。嬉しいことに、38 名（49.4%）もの学生が「大変思った」、26 名（33.8%）が「やや思った」を選択していた。今回のイベントに参加したことで、参加者の約 83% が海外経験に対して積極的になったことを意味しており、期待した効果が確かに得られたことが示された。

6. 考察

本稿では、12 月に三重大学国際交流センターが産学官連携のもと開催した「グローバル人材白熱教室 2019」の概要と実施結果について報告した。この事業は、中部国際空港協議会が近年繰り返し広げている若年層渡航促進事業の一環であり、その事業に携わる三重県庁交通政策課との連携により昨年本学ではじめて実現され、今回で 2 回目となった。

6. 1. 国際教育におけるコーチング教育の有効性と課題

セミナーの数日後に著者が担当する授業で聞いた参加学生らに感想を求めても、辰野氏によるセミナーの評判は極めて高かった。「先週の辰野先生のお話について聞きます。1 が「まったくつまらなかった」5 が「大変良かった」であれば、どのレベルですか？」と

口頭で聞いたところ、5 の「大変良かった」で 9 割の学生の手が挙がったのである。確かに、セミナーで見られた参加学生らの眼の輝きは、残念ながら普段の授業で見られることは少ない。基礎知識をインプットしていく専門の授業であれば仕方のないことかもしれないが、コミュニケーションやアクティブ・ラーニングを推進する授業では、学生らをウキウキと高揚した心理状態にもっていくことが目に見える成果とも言える。

彼らの「大変良かった」は、教育関係者にとって重要な意味を持つ。昨年招聘した出口学長（2017）の考えによると、「人材は育てる」というよりも「見つけ出すもの」であり、「育てる」という考え自体が傲慢であるとのこと。人には様々な個性や資質があり、「海外留学」「グローバル人材」という言葉に関心を示さない学生も多い。だが、潜在的には「海外で新しい経験をしたい」「自分を変えたい」のような想いを抱いているとすれば、それらの存在に気付かせる機会が必要となる。今回の「大変良かった」という感想は、その「気付き」であり、自分の新たな面を発見できた事に対する満足感からきている可能性がある。ある学生は、以下のように感想を書いた。「今まで世界は広く海外の話なんてそんなんに関係ない、そう思っていた私の考えが180度変わりました。（中略）自分から世界の問題について知っていこうという姿勢を忘れないようにしていこうと思います。」

辰野氏は次のように語っている。『『世界とつながる前に、まず、自分の思いであるモヤモヤ、ドキドキ、とつながる』というプロセスを大切にしています。心のどこかで感じワクワクを見つめ、何が起きているのか、なぜ自分は海外に出たいのか、なぜ学ばなければならないのか、どんな人生を送りたいのかを考えます。自分を振り返り理解し、自分自身を受け止めることが、多様性あふれるこれからの地球社会において自分の軸を持ち生きるために不可欠です』（GiFT 2019）と。

つまり、学生の二極化において一見「向上心が低い」「消極的で内向き」グループは、辰野氏の言葉を借りていえば、まだ「自分とつながっていない」学生を多く含んでいる可能性が高い。「世界とつながる前にまず自分自身とつながること。その先に、世界とのつながりが見えてくる」（GiFT, 2019）のであり、自分自身を理解していない段階で、「世界に視野を拡げよう」と促されても無理がある、ということなのだ。

教育心理学的な観点から言えば、自分の考えを客観的に理解する「メタ認知」（Metacognition; e.g. Flavell, 1979）を活動させることが重要である。辰野氏は参加者に「30年後の自分」を妄想してそれを記述して可視化させ、他の参加者との対話を通して彼らのメタ認知を鍛えた。その結果、彼らの自己肯定感を高めることに成功したのだろう。参加者らのいつにない瞳の輝きと満足感は、この自己肯定感と多に関係しているものと推測できる。

今後、彼らがこのメタ認知を日常的に働かせることができれば、過去のネガティブな自動的思考(例:「どうせ自分は無理」)から脱却し、行動を含めた問題解決をとることを習慣とすることができるかもしれない。この理解が正しければ、今回のようなコーチング形式の国際教育セミナーは、「内向き傾向にある」と言われることの多い現代の若者らの心に響く教育方法であることが考えられる。

その一方で、「SDGs について学術的な情報が少なかった」「講師の個人的な体験や人生観に終始した印象がある」等の批判的な意見が一部の参加者からのコメントに見られた。彼らの感想はもっともである。なぜなら、当初から SDGs の課題に対して学術的な情報を求めるような層をターゲットにしていなかったからである。そして、辰野氏の言葉を借りて言えば、彼らはすでに「自分とつながっている」人々であるので、今回のようなコーチング形式のセミナーは不向きであったかもしれない。ただ、教職員の方々には、辰野氏によるコーチング形式のセミナーが多く参加者のモチベーションを上げた事実を認識し、学生の二極化問題に対する一つの方策として参考にしていただければと思う。イベント内容を差別化することは、海外留学だけでなく、就職活動への準備プログラムを企画する上でも有効であるだろう。

6.2. 産学官連携の有効性と課題

前述したように、産学官連携事業による有効性は大きく、セミナーを提供する側としては参加者の LCC へのイメージ改善や海外渡航に対する興味の強化において数値的に見る限り成功したと言える。参加者のターゲットは昨年と今回では異なるものの、効果は昨年とほぼ同等であったことは興味深い。LCC へのイメージ改善では昨年から引き続き約 65%、海外渡航に対しては約 85%もの参加者にポジティブな方向で効果があったことがわかった。この効果を実際の行動(海外渡航、留学)に向けて実現させるために、主催者側は継続して海外留学や研修プログラム、渡航キャンペーン等の周知をしていく必要があるだろう。

ただ、「海外渡航促進の広告」と捉えて異議を唱えた留学生 2 名が存在していたことは無視できない。彼らは欧州からの留学生であるが、アジア諸国と比較して初等教育から高いレベルのメディア・リテラシー教育が身につけている。大学という極めて公共性の高い組織が産学官連携を通じてビジネスに関与することに対して不快感を持ったことがうかがえる。空港も含めて企業の本質的な行動原理は私的経済利益の追求であり、大学が得ているような公的な経済的支援なく自助努力を基本としている。この意味で、欧州からの留学生が伝えた不快感は正当な反応であり、逆に宣伝とも言える情報を素直に受け入れる日本人学生やアジア諸国からの留学生の方が危ういかもしれない。

しかしながら、昨年から実施している中部国際空港協会との本事業は利益相反には当て

はまらないだろう。本事業は、「特定企業との連携を深めていく中で、その期待される役割の公共性とのバランスをいかに取っていくかが重要な課題となる」（文部科学省，2003）ことを理解した上で、企画されてきたからである。昨年度、参加者は出口学長から「グローバル時代の中でイノベーションを起こせるような人材」について学び、今年度の辰野氏からは「国際性と SDGs に対する意識を涵養するために必要な自己肯定感」を強めることができた。そのような機会を学生に与えることは大学に期待される役割であり、その線にある海外渡航や留学は彼らにとって大きな学びの一つである。ただ、今後は留学生を含めた参加学生に対して、その趣旨をさらに明確に伝える義務があることは確かであろう。

最後に、SDGs と航空会社の関係について言及する。現在、世界の航空会社全体が排出する CO₂ の量は全ての CO₂ 排出量の 2% を占めることから、削減を含めた具体的な行動を求める SDGs（第 13 番目）の実現に対して厳しい立場にある。北欧では、スウェーデンの高校生で環境運動家であるグレタ・トゥーンベリさんの影響で、今や飛行機に乗ることは「飛び恥」という言葉も生まれているほどである。6 月には、KLM オランダ空港が“Fly Responsibly”（責任ある飛行）計画の一貫として、企業 CM で「飛行機の代わりに電車で移動することはできませんか？」という内容を流し、世界の航空会社に衝撃を与えた（Business Insider, 2019）。エルバース社長によると、「航空業界はまさに弱肉強食の世界」であり、「常に（環境問題に対して）責任を果たし続けないと生き残れない」時代に突入しているのである（加藤，2019）。今後は日本の航空業界でも SDGs の推進が活発化していくことが予測される。その意味で、今回の「グローバル人材白熱教室 2019」は極めて時代に即した試みであったと言えるのではないだろうか。

7. おわりに

今後も、本学を含めた三重県下の教育機関において、SDGs を意識した国際教育が、様々なかたちで産学官連携のもと継続されることを望んでいる。その連携に支えられた教育が、地球や社会が抱える様々な課題を「自分ごと」と捉え、自ら行動し、解決する意欲にあふれた人材を多く輩出することを期待してやまない。

最後に、中部国際空港利用促進協議会と三重県庁地域連携部交通政策課の皆様、そして協力してくれた学生と教職員の方々に、厚く御礼を申し上げる。

<参考文献>

外務省（2016）「SDGs 実施指針改定版」2019 年 12 月 23 日アクセス
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/advocacy.pdf>

- 学研 (2012) 「特集：留学への関心度は二極化短期プログラムで増加なるか？」2020 年 1 月 3 日アクセス <<http://www.gakuryoku.gakken.co.jp/pdf/articles/2012/7/p6-9.pdf>>
- 加藤ニール (2019, 10 月 24 日) 「逃げ恥、飛び恥、赤っ恥～飛行機に乗るのは恥ずかしい？」NHK News Web 2020 年 1 月 5 日アクセス
<<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20191024/k10012146491000.html>>
- 官邸 (2015) 「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」2019 年 12 月 27 日アクセス <<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/dail/sankou3.pdf>>
- 官邸 (2012) 「グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」2019 年 12 月 27 日アクセス <<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>>
- 木村正人 (2019, 12 月 9 日) 「セクシーじゃないね」化石賞に輝いた日本の石炭依存度」News Week 日本版 2020 年 1 月 3 日アクセス <https://www.newsweekjapan.jp/kimura/2019/12/post-68_1.php>
- 栗田聡子 (2019) 「『グローバル人材育成』における産学官連携の可能性 ～出口治明氏 (立命館アジア太平洋大学学長) を迎えて～」『三重大学国際交流センター紀要』第 14 号 pp.67-83.
- 国土交通省 (2017) 「若年層による海外旅行市場の活性化に向けた中部国際空港の取り組みについて」2019 年 12 月 27 日アクセス <<https://www.mlit.go.jp/common/001270472.pdf>>
- 国連開発計画 (2019) 「持続可能な開発目標」2019 年 12 月 27 日アクセス <<https://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals.html>>
- 菅原秀幸・石川尚子 (2015) 「アカデミック・コーチングが教育イノベーションを実現する可能性：オランダのコーチング主体型教育から考える」開発論集 (95) pp.13-28.
- セントレア (2019) 「セントレアの産学連携」2020 年 1 月 3 日アクセス
<<https://www.centrair.jp/corporate/torikumi/industry-collab>>
- 竹下郁子 (2019, 10 月 15 日) 「『飛行機でなく電車移動を』捨て身の呼びかけする航空会社。欧州では「飛び恥」という動きも」Business Insider 2020 年 1 月 3 日アクセス
<<https://www.businessinsider.jp/post-200561>>
- 中部経済連合会「中部国際空港利用促進協議会」2019 年 12 月 27 日アクセス
<<http://www.chukeiren.or.jp/outline/organization/2013/09/post-9.html>>
- 三重大学 (2019) 「国際環境教育研究センター」2019 年 12 月 27 日アクセス
<<http://www.gecer.mie-u.ac.jp/center/greeting.html>>
- 文部科学省 (2019) 「持続可能な開発目標 (SDGs) 採択に至る経緯」2019 年 12 月 27 日アクセス
<https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/07/01/1418526_001.pdf>
- 文部科学省 (2003) 「今後の産学官連携のあり方」2020 年 1 月 3 日アクセス <https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu8/toushin/attach/1332041.htm>
- Flavell, J. H. (1979). Metacognition and cognitive monitoring: *A new area of cognitive-developmental inquiry. American Psychologist*, 34 (10), pp.906-911.
- Fly Team News (2019) 「セントレア、2018 年度旅客数は 7 年連続で増加 過去最高を記録」2019 年 12 月 27 日アクセス <<https://flyteam.jp/news/article/109300>>
- GiFT (2019) 「グローバル・シチズンシップ (地球志民)」2019 年 12 月 27 日アクセス

産学官連携による SDGs 教育とグローバル人材育成事業の実践～中部国際空港協議会/県庁との海外渡航啓発事業第 2 弾～

〈<https://j-gift.org/about/global-citizenship-education>〉

Oxford dictionary (2019) “About Word of the Year” 2019 年 12 月 27 日アクセス

〈<https://languages.oup.com/word-of-the-year/word-of-the-year-faqs>〉

THE 世界大学ランキング日本版 (2019) 「THE 大学インパクトランキング発表！日本の大学の社会貢献度は？」 2019 年 12 月 25 日アクセス

〈<https://japanuniversityrankings.jp/topics/00105>〉